

回遊美術館Ⅱ —北浦和西口銀座商店街アート化計画

2011年12月3日～11日 北浦和西口銀座商店街・埼玉県立近代美術館

車を気にせずに歩いて、昔ながらの風情がのこる北浦和西口銀座商店街の愛称は「ふれあい通り」です。そのゲートや中心部を飾っているモニュメントは、20年以上前に設置された彫刻家・本田貴侶さんの作品ですが、今ではすっかり周囲の環境に馴染んでいます。

この商店街そのものを会場としてのアート作品の展示は、2008年(竹のサウンドオブジェ)、2009年(回遊美術館Ⅰ)に続いて今回が3度目、商店街の方がたともしずつコミュニケーションが取れるようになってきました。今回は5組のアーティストを招き、アーティストと商店街有志、事務局で月一度の打ち合わせをおこないながら準備を進めました。会期は前回の3日間から9日間へと大幅に延長、協力店舗数も約40店舗とこれまでで最大でした。アーティストのひとり山本耕一郎さんが会期の3週間前から現地入り、「北浦和出逢い景」プロジェクトの制作活動をおこなったこともあって、「回遊美術館Ⅱ」に対する認知度も高まっていったようです。埼玉大学学生有志の協力で商店街のマスコット・キャラクターを作成して人気投票を呼びかけたり、空き店舗を借りて展示スペース

兼現地本部として活用したりと、これまでになかった試みも見られて、商店街の方がたからも「よかった」「楽しかった」という声を多数いただきました。乏しい予算にもかかわらず、興味を持って積極的に関わり、柔軟に対応してくださったアーティストのみなさんに感謝しています。

自治会や地元の小学校にも働きかけて、子どもたちを対象とするプログラムも加えた相乗的な展開を図れたら、さらに充実した内容になったと思われそうです。SMFの人財を活かして、美術のみならず、音楽、ダンス、文学、建築など、いろんな切り口で、まちや公園と美術館を行き来しながら楽しむ場、「サッカーのまち」だけでない「美術館のまち」北浦和をイメージできるような楽しい場を、商店街や地域のみなさんとワイワイやりながら、時間をかけて築いていけたらと願っています。

中村誠(SMF事務局)

出品作家・作品紹介

発想豊かに商店街とコラボレートした5組のアーティストたち。twitterやfacebookで紹介して下さる来場者もあり、作品を通しての出会いとコミュニケーションが、まちに広がっていました。



田中清隆
《LIGHT WORKS「居場所」=スワルカタチから 七福座+α》

七福神巡りになぞらえて、7つの商店に光をともしたイスのオブジェ。手作りの案内表示や花を添えてくださるお店もあり、来場者からの投票シールで彩られた姿が誇らしげでした。埼玉県立近代美術館エントランスには、関連作品「四賢人の間」が。来館者の目をひくとともにガイドツアーの起点になり、商店街と美術館との回遊ルートができました。

【Lecoeur、Wardrobe、昭和薬局、横内酒店、ゴールドフォンテン、みのりや、ふじや、埼玉県立近代美術館エントランス】

松本秋則《八百屋にモビール》

形も種類もさまざまに、ユニークな音色を奏でる竹の「サウンドオブジェ」。時間とともにうつりかわる動きとそのシンフォニーで八百屋さん



を異空間に変えました。お客さんがみな驚き、「音が気に入った」と好評。作品や作家についての説明を加えてくださる店主ご一家の嬉しそうな笑顔が印象的でした。【小松屋】

SYUTA(三友周太) 《HIMONINGEN Project》



2本のひもで、人と人との縁を結んでつなげる「HIMONINGEN」。本部の壁面で踊りまわるヒモ人間の集団がまちの人の興味を誘い、作家やスタッフとの会話も弾みました。ほか10店舗に隠れ潜んだうちの数体は商店街の方の作。全部見つけようと意気込む親子連れの姿や「作ってみたい」との声、会期終了後も展示を続けてくださるお店がありました。

【回遊美術館実施本部(若松湯入口)、上村豆腐店、中華楼、グリーンマートHANO、川口信用金庫、fines、Blossom、りぼん、昭和薬局、OITIMO、布袋家】

山本耕一郎《北浦和出逢い景》

誰もが「噂のあのひと」になれる「うわさバッチ」を屋台で配り、身につけた人を写真撮影。会期の数週間前から作家がまちに滞在し、撮った写真は500枚以上。また、展示への協力店は30軒を超えました。自分の写真を探し、知人の写真を見つけて喜ぶ、何度も屋台に通う、家族や友人を連れてくるなどなど、老



若男女を問わず大勢の方が参加し、まちに笑顔が広がっていききました。

【北浦和西口銀座商店街の各協力店舗】

社会芸術／ユニット・ウルス〔安部大雅、鈴木一、野口眞一郎、長谷川千賀子、三木祥子、吉川信雄、吉田富久一(代表)〕 《東西見聞シェルター計画》



社会で暮らす生活者の視点から、さまざまな芸術活動を展開する仲間たち。商店街に建てたゲルに道行く人を招き入れ、寒空の下であたたかな交流の輪ができました。路上で足跡を採取し、3台の「自力更生車」も出動。作品を売りながら人や自然についてお客さんと語り合い、またご年配の方や小さなお子さんを連れたお母さんが昔懐かしい蓄音器の演奏に聴き入っていました。

【サイトウ薬局倉庫前、埼玉県ときわ職員住宅前ポケットパーク、北浦和駅前ほか】

小野寺茜(SMF事務局)

《回遊美術館Ⅱ》への参加をふりかえって

北浦和西口銀座商店街は通学路に近いということもあり、埼玉大学の学生にとって、とてもなじみ深い商店街です。そこを舞台に新たなアートの楽しみ方を提案する今回の試みが埼玉大生にとって(特に美術科教員を目指す

者にとって)大きな刺激となることを期待して参加を呼びかけたところ、数名の有志が応えてくれました。

彼らはボランティアとして「うわさバッチ」の制作や、「ゲル組み立てワークショップ」に参加したり、サポートスタッフとしてインフォメーションセンターのお手伝いをしたりなど、多方面にわたって活躍し、しなやかな若さを示してくれました。



なかでも学生の力が最も発揮されたのは、商店街の方がたから依頼されたマスコットキャラクターづくりの取り組みでした。学生からはさまざまなアイデアが提案されましたが、協議の結果、複数のアイデアを組み合わせることで3タイプの『きたうらワン』のデザイン案がまとまりました。最終的には投票で決めることとなり、会期中におこなわれた投票の結果、投票総数141票の中から68票を獲得したタイプ②のデザインが選ばれました。投票の中には、アイデアを検討する過程で生み出された他のキャラクターにも多数の投票があり、訪れた方がたと学生たちとの間に楽しい会話が広がるなど予想外の展開が商店街にささやかな彩りを添えていました。

たった9日間でしたが「回遊美術館Ⅱ」に参加した学生たちは、アートを通じた出会いが人びとの心に及ぼす影響の大きさを実感してくれたのではないかと感じています。今回の体験が糧となり、将来彼らがおこなうさまざまな美術活動の場面で大きく芽吹くことを願ってやみません。

石上城行(SMF運営委員)

